

オオメワラスボ科魚類 *Navigobius dewa* モモイロカグヤハゼ (新称) の生息状況

出羽慎一¹・出羽尚子²・本村浩之³

¹ 〒 890-0067 鹿児島市真砂本町 7-7 ダイビングサービス海案内

² 〒 891-0132 鹿児島市本港新町 3-1 いおワールドかごしま水族館

³ 〒 890-0065 鹿児島市郡元 1-21-30 鹿児島大学総合研究博物館

■ はじめに

Navigobius dewa Hoese and Motomura (図1) は2009年に鹿児島湾から採集された3標本(標準体長37.5–45.2 mm)に基づき、オオメワラスボ科クロユリハゼ亜科の新属新種として記載された。*Navigobius* 属はクロユリハゼ属 *Ptereleotris* とハタタテハゼ属 *Nemateleotris* に近縁だが、前者は両眼間隔側線管 (interorbital canal) が眼間で完全に連続していないことなどで特徴付けられる (Hoese and Motomura, 2009)。

Hoese and Motomura (2009) は、*Navigobius dewa* の分布域として、鹿児島湾(タイプ産地)と奄美大島(水中観察)を報告したが、その後、本種が伊豆半島(本報告)にも生息することが確認された。したがって、本種は南日本に広く分布している可能性が高い。

Navigobius dewa と *Navigobius* 属に適用すべき標準和名が原記載で記載されていなかったため、本報告で両和名を提唱する。また、鹿児島湾と伊豆半島を中心に本種の生息状況を報告するとともに、本種の飼育記録を紹介する。なお、本研究で用いた標本はオーストラリア博物館(AMS)と鹿児島大学総合研究博物館(KAUM)に保管されている。

Dewa, S., N. Dewa and H. Motomura. 2010. Ecological notes on a recently described microdesmid fish, *Navigobius dewa*, from Japanese waters, with a proposed new standard Japanese name for the species. *Nature of Kagoshima* 36: 89–92.

☑ HM: Kagoshima University Museum, 1-21-30 Korimoto, Kagoshima 890-0065, Japan (e-mail: motomura@kaum.kagoshima-u.ac.jp).

■ 名前

オオメワラスボ科 Microdesmidae

クロユリハゼ亜科 Ptereleotrinae

カグヤハゼ属 (新称)

Navigobius Hoese and Motomura, 2009

モモイロカグヤハゼ (新称)

Navigobius dewa Hoese and Motomura, 2009

Navigobius はラテン語で泳ぐ (*Navi*) ハゼ (*gobius*) を意味し、泳ぎ回っている本種の生態に基づく。種小名の *dewa* は、採集者(本報告の第1著者)に献名された。なお、クロユリハゼ亜科は研究者によってクロユリハゼ科として扱われているが、本報告では原記載にしたがって亜科とする。

本種は桃色の美しい体色を呈していることから、本報告では鹿児島湾産の3標本[ホロタイプ AMS I. 44800-001 (図2)とパラタイプ KAUM-I. 5516-5517]に基づき、*Navigobius dewa* に対して新標準和名モモイロカグヤハゼを提唱する。また、*Navigobius* 属の和名としてカグヤハゼ属(新称)を提唱する。鈴木・渋川(2004: 512)のクロユリハゼ科の1種-1 (*Ptereleotridae*, indet. gen. and sp. 1) は、カグヤハゼ属の2番目の種(現在未記載種)であると考えられる。

Motomura et al. (2010: fig. 570) は、屋久島永田沖の水深45 mで撮影された写真個体を *Navigobius dewa* として報告したが、その個体は上述のカグヤハゼ属の2番目の種 (*Navigobius* sp.) の成魚である[鈴木・渋川(2004)のクロユリハゼ科の1種-1は幼魚の写真]。



図1. モモイロカグヤハゼの成魚。鹿児島市東桜島町沖，水深62 m，2009年6月8日，出羽慎一撮影。



図2. *Navigobius dewa* のホロタイプ。AMS I.44800-001，標準体長37.5 mm，鹿児島市東桜島町沖，水深70 m，2007年7月25日，出羽慎一採集。



図3. モモイロカグヤハゼの幼魚。鹿児島市東桜島町沖，水深45 m，2008年10月30日，古宮 豊撮影。



図4. モモイロカグヤハゼの群れ。鹿児島市東桜島町沖，水深59 m，2010年4月15日，出羽慎一撮影。



図5. モモイロカグヤハゼの成魚。静岡県伊東市富戸伊豆海洋公園，高瀬 歩撮影。上図：水深72 m，2009年7月16日。下図：水深68 m，2009年7月28日。

■ 鹿児島での生息状況

下記の生息状況は第1著者の水中観察に基づく。鹿児島湾では、モモイロカグヤハゼの群れが11月中旬から5月まで水深75-85 m付近，6月から11月上旬までは45-60 m付近で観察された。

冬から春にかけて1つの群れは10–30個体ほどで構成され、夏になると1つの群れが200–300個体、多い時には1ダイブで15個の群れが確認された。また、10月下旬から11月にかけて、全長2cmほどの幼魚が10個体ほどで群れを構成しているのが観察された(図3)。2004年から現在にかけて、鹿児島湾では年々本種の個体数が増えており、2009年秋から2010年4月現在までは、水深55–70mに数千個体からなる1群が留まっている(図4)。

本種は、岩礁が散在する砂泥底の急斜面で観察され、概ね岩礁のまわりで底から約30cm浮かんだ状態で群れている。観察のため接近すると、砂中や岩陰に逃げ込むのではなく、泳いで逃げ回る。また、本種は、透明度が低く水中が暗いときにはやや浅いところへ、透明度が高く明るいときには深いところへ移動する傾向がみられる。

奄美大島では、2007年5月に本種の生息が確認された(Hoese and Motomura, 2009)。観察場所は、奄美市龍郷町秋名付近の岬先端沖のリーフ外縁で、約30個体が水深60mの礫まじりの砂底に生息することが観察された。

■ 伊豆半島での生息状況

下記の生息状況はさかなや潜水サービス(静岡県伊東市)の高瀬 歩氏の水中観察に基づく。伊豆半島東岸の伊豆海洋公園では、緩やかな斜面の転石混じりの砂地で本種が周年観察される(図5)。特に水深70m付近で成魚10個体前後が群れを形成しており、2月の最低水温(12°C)時にも活発に泳ぎ回っている。水深70m付近で稀に全長3–4cmの若魚も確認された。水深55m付近でも4–5個体で群れている幼魚が確認されている(2006年11月)。このことから、本種は鹿児島湾や伊豆半島では、初秋に産卵していると考えられる。また、生息地が砂地の斜面というのも伊豆半島、鹿児島湾、奄美大島で確認された共通の生息環境である。

■ 飼育記録

鹿児島湾産のモモイロカグヤハゼ16個体がおワールドかごしま水族館で飼育展示されている(2010年3月現在)。これらは2009年11月17日に、鹿児島湾の水深64mから第1著者とかごしま水族館職員によって採集された個体で、同館の特別企画展「集まれごもんちゃん～小さなハゼの大きな世界」の展示生物のひとつとして、12月19日より一般公開された。

採集時の全長はおよそ3–5cm。展示は幅93cm、奥行63cm、深さ70cm、水量約1tのユニット水槽を半開放式にして行なった。展示期間中の水温は14–19°C、phは7.9前後、塩分濃度は33–34‰、溶存酸素濃度は98%前後であった。照明は高演色性波長の18W蛍光灯2灯を9–19時まで10時間点灯した。水槽内には粒径1mm前後のパウダー状のソイル(焼成底床)を約5cm厚に敷き、レイアウト用に溶岩塊とヤギ類の骨格を配置した。

ほぼ毎日、概ね1–2回アルテミアのノープリウス幼生や冷凍コペポダなどを与えた。給餌時、飼育している全てのモモイロカグヤハゼは、水槽全体に広がるように遊泳し、水流に乗って流れてくる上記の餌を活発に摂餌した。これらの給餌によって、モモイロカグヤハゼは飼育期間中もわずかではあるが成長し続けている。

モモイロカグヤハゼは、展示開始時から3週間経っても人影や物音に怯えて溶岩塊の下の底砂に穴を掘り、潜り込んで出てこない状態が続いた。そこで、水槽内の入り込めるような障害物を取り除いたところ、展示期間を通して照明が点灯している間は、多くの個体が水槽内を遊泳するようになった。照明が消えた後は全個体が1箇所に集まり、配管の横に掘ったくぼみに隠れてじっとしていることが多かった。大型個体は小型個体に比べて警戒心が強く、照明点灯時もくぼみに身を隠すことがあった。

本種は警戒心が強いものの、飼育はさほど難しくないのである。今後、産卵生態などの観察ができれば報告したい。

■ 謝辞

伊豆海洋公園での本種の生息状況と写真を提供して下さった Dive Company さかなや潜水サービスの高瀬 歩氏と幼魚の写真を提供して下さった鹿児島市桜島町在住の古宮 豊氏に感謝する。

■ 引用文献

Hoese, D. F. and H. Motomura. 2009. Descriptions of two new genera and species of ptereleotrine fishes from Australia and Japan (Pisces: Gobioidae) with discussion of possible relationships. *Zootaxa*, 2312: 49–59.

Motomura, H., K. Kuriwa, E. Katayama, H. Senou, G. Ogihara, M. Megurom, M. Matsunuma, Y. Takata, Y. Yoshida, M. Yamashita, S. Kimura, H. Endo, A. Murase, Y. Iwatsuki, Y. Sakurai, S. Harazaki, K. Hidaka, H. Izumi and K. Matsuura. 2010. Annotated checklist of marine and estuarine fishes of Yaku-shima Island, Kagoshima, southern Japan. Pp. 65–247 in H. Motomura and K. Matsuura (eds.). *Fishes of Yaku-shima Island – A World Heritage island in the Osumi Group, Kagoshima Prefecture, southern Japan*. National Museum of Nature and Science, Tokyo.

鈴木寿之・渋川浩一. 2004. 決定版 日本のハゼ. 平凡社, 東京. 534 pp.